

心のパン屋さん

私には仲良しの友人のパン屋さんがあります。その人は、札幌にいます。

その人は、以前、私の勤めていた中学校の警備員さんでした。たいていの警備員さんは、見廻りのほかは、テレビなどを見ながら、夜の時間を過ごすのですが、その人は司法試験を受けるために、一生懸命勉強していました。私は、その姿を見ていて、何となく親しみを感じていました。

私も学校の仕事が忙しく、たいへん遅くまで学校に残ることが多かったので、いつとはなく仲良しになって、何かと親切に心づかいをしてくれるようになっていました。

私が退職して三年め、母校の音楽会にお誘いしようと思つて電話をかけました。その人はやめていました。移転先に連絡してみますと、何回受けても駄目だった司法試験をあきらめ、パン屋さんの学校に入り、今は自分でパンを焼いて売っているということでした。そして、「ふつうのパンだけでなく、心のパンも売るので」と言つて、元気でした。

私は興味をそられて、どんなふうか？ と聞いてみますと、店の一部分を喫茶室のように

して、そこでときどきコンサートをすることでした。音楽家の友達に来てもらつて、演奏してもらうのです。ピアノのこともあり、バイオリンのこともあり、オボエのこともあり、音楽家の友達も、聴いてもらうのを楽しみに、演奏してくれます。

プログラムが半分くらい進みますと、休憩になつて、上手に入れた紅茶と、それからお手製の——パン屋さんですから——とてもおいしい、口に入れると、とろとろと溶けてしまうようなケーキが出ます。そのお茶を飲み、そしてケーキをいただいて、そこでまた音楽を聴く。そうしたような小さなつどいをしていっているのです。

だいぶ理解する人があつて成功して、近所にたぐさんの——といっても四つですけれど——支店を出しました。その四つ目の支店が今度開店しますについて、私もそのコンサートに行つたわけです。そのときは、「音楽とトークのつどい」というわけで、私は音楽と音楽のあいだに、小さなお話をしました。そして、私は、心のパンを売っているその人の、とても頼もしく、懐かしい姿を見ってきました。それで、私も「心のパン屋さん」という題がつけたくなつたというわけです。